

本稿は、明らかにテキストを目指してはいない。テキストを学んでいる間は、知識も頭に入らなければ、技術も手につかないことを申し上げたいという気持ちが、全編を貫いている。

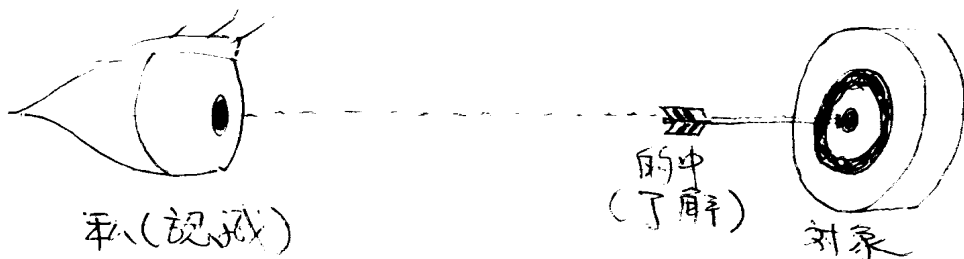
つまり、どのページも「だから習得するのではなく、ここに書かれてあることに、読まずとも気付きなさい。」という、いわば実例によるヒント集のようなものだ。しかしこのようなヒントを「萬」と与えられ、読み、暗記しても身には付かない。このようなことを援助なしに「気付き」はじめるためには、「咬合」に向かい合う姿勢というか、観察とか思考にちょっとしたスタイルのようなものが必要である。どこを開いても一樣の雰囲気のようなものが感じられると思うが、私としては「内容」よりもこの「雰囲気」を修得して欲しいのである。

テキストの一切が役に立たず、テキストを読めば読むほど、知識を頭に入れば入れるほど、盲目になっていくことに気付いて欲しいのである。では、一切のテキストから離れて、何から始めればよいのであろうか。テキストも、先人達の経験も、客観的に集積したデータも、それらを一切排除するということと、これからのあなたの経験や思索を大切にすることとは、どのように違うのであろうか。

1900年代初頭にE・フッサールは同様の悩みを抱えていた。彼は「現象学」という哲学の一分野を創始したが、それはハイデガーやM・ポンティエー、サルトルに深い影響を与え、また、私自身にも大きな影響を与えた。私が受けた何よりも大きな現象学の恩恵は、「判った」つもりが実は「判って」いないことが判った点である。

認識という私の内部のものがどうして外部の対象を理解(的中)できるのであろうか。

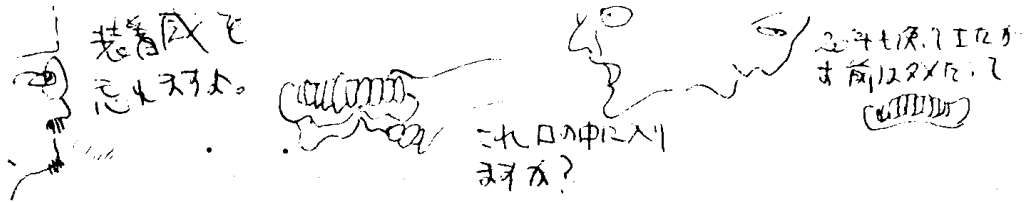
フッサールは現象学的考察に段階を踏んで、誰もが確実に真の認識に至れる道しるべを記してくれている(「現象学の理念」みすず書房)。確実な「咬合」の認識を得るために、フッサールのコースに乗ってみよう。



## <第1段階>

### 1：我々はいかなる認識をも最初から認識として受け入れてはならない。

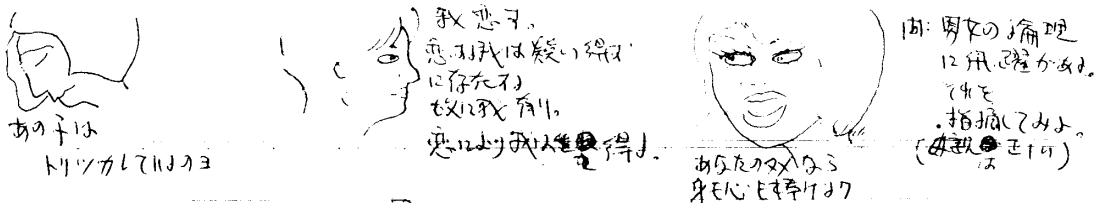
「総義歯は難しい」と言われる。その通りである。その理由は製作手順の技術だけではなく、患者さんの感覚を他人の歯科医師がいかにして受容するかという技術が要求されるためである。総義歯体験のない歯科医にとって、「義歯で咬むこと」が分からないから「咬めない義歯とは何か」が分からないのである。理屈の上では完璧な義歯製作手順であっても現実の患者の装着感は又別であることを承知しておかねばならない。



つまり義歯を認識（理解）しているといってもそれが本当に対象（義歯）に的中しているかどうかは上記の例でも判るように極めて曖昧である。曖昧性の残る認識は認識としなくておこうというのがフッサールの第1段階の第1歩である。“本当に的中することが確実な認識の実例にまず注目せよ。”（フッサール）

### 2：出発点はデカルトの懐疑考察である。 内在と超越。

「懐疑考察」という難しい表現をしたが、“間違っているのではないかと疑ってみる”ことである。デカルトはついには悪魔が“この自分自身すらも本当の私ではないのに私と思わせているのではないか”と自分の存在を疑う程になった。しかし、最後の最後には“このように考える自分の存在（悪魔までも持ち出して自分を考えようとする自分の存在）は疑いようかない”と結論を出した。



“我思う。故に我あり。”は、方法論的懐疑の原点である。ここで注意しておきたいのはデカルトが確認した認識は「我」の存在であって、「我とは何か」という意味が分かったのではない。「考えている自分が存在していること」が疑いのないこととしたのである。このデカルトの成功は認識対象が「我」にあったからで、同じ存在でも「我」の外部の「物」では成功しなかったかもしれぬ。デカルトに習って我々も最初の出発点として我々の内にある意識から始めよう。

一切の既成概念を排除して説明も解釈も加えずに、ただ見ただけのものを見たとおりに見た時、その見ている意識体験は疑いもなく存在し、そのときの直ちに観とられた（直観した）外部の物は私の内部に見たとおりの物として取り込まれ私の原初の認識となる。この原初の段階にあっては、私の外にあるそのものは私が観たとおりだけのものと考えられ、私の内部には観たとおりのままとして認識されている。

であるから、この原初の認識は直観そのものであって「私の内の認識がどうして私を越えて外部の物に的中するのか。」とか「意識の枠内に見いだされない存在に認識はどのようにして的中しうるのか。」とかいう難問題は直観という意識体験を通じた直観的認識の場合にはありえない。

一方、これに対して、客観的な自然科学の認識は、自己を越えた論理で存在しており、超越的認識といわれる。

下顎の咬頭嵌合位（上下の歯牙がしっかりと咬み合わさった状態の下顎の位置）を考えてみよう。定義を読んだだけの時と、ゆっくりと咬み合わせていったときの歯牙のゆらぎや顎骨のしなりを直観すれば、咬頭咬合位にもさまざまなステージのあることが分かるであろう。この位相差のある事態に対し、一義的に定義付けすることは実は不可能なのではないか。しかも「上下歯列が最大面積でもって接触し合う」という直観不能な条項をいれるとなれば、これはもう机上の定義でしかない。定義を読んで分かったと思った自分に「何が分かった」のであろうと自問する必要がある。そして、この疑問は咬合論全体を更には補綴学全般を貫くのである。超越的認識を排除して、内在的認識のみを基礎とせよ。さて一から始めよう。

### 3：リアルな内在と志向的内在

“見えたもの”をそのままに“見たもの”として取り込むときに、そこに何らの意識の操作を加えてはならない。例えば、古くなった義歯を裏打ち（リベース\*1）しようとしてリベース材を置き、リベース印象したとしよう。本人がそれをリベース印象と呼ぶのであればそれはその本人から超越した行為である。（実際にリベース印象になっているかどうかは全く別次元である。）嵌合した上下歯列を見たとき“嵌合位”を見たと思った瞬間に対象は観察者を超越している。観察者は一見したところ嵌合している上下歯列を見ただけであって、嵌合位を見ているかどうかは別の話である。

“見えるがまま”の見取ったものを“リアルな内在”と呼ぶことにすれば、内在している（自分にもものになっている）と感じられはするのであるが、その内在に無意識のうちに意識が作用してしまって見えたもの以上のものを付加してしまった加工された内在もある。フッサーはこの加工された内在を「志向的内在」（立松：注）と呼んでいる。もちろんここで取り扱う内在は加工されていない「リアルな内在」である。

#### 4：純白の内在へ。現象学的還元。

リアルに内在したと思っても知らぬ間に意識がリアルを加工しているかもしれないから、常に超越的な意識がリアルに加工を加えていないかどうか、純白の見えるがままへ還元を遂行せねばならない。この方法論的操作をフッサールは「現象学的還元」と呼び、現象学の核心部分でもある。「現象そのものへ」の呼びかけはこのことを端的に表わしている。

『どのように認識は私の外部の事(超越者)に的中することができるのか』が私(フッサール)には判らない。盲人が光を見たいと言ってもいかに光学が進展しようとも科学的論証では全く解決が出来ないであろう。』同様に臨床体験のない歯科学生にいかに臨床講義を行っても、臨床は伝達できない。

これは大学を卒業して歯科医となったばかりの人においても言える事である。



勉強はしなくてはならない。しかし勉強して判ったつもりになった瞬間が怖いのである。あたかも光学を学んで美しい光を見たと言っているのに等しいからである。

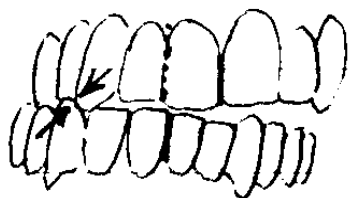
『現象学的還元とは、一切の超越者(私に内在的に与えられていないもの)に無効の符号をつけることであり、すなわちその超越者は本当に存在しているのだ、とか正しい、とかを鵜呑みにしないでせいぜい妥当現象として考えるに止め置かれるがよろしい。たとえば、一切の自然科学など学問を私はただ現象として利用しうるに過ぎず、従って私の樹立しようとする真理体系にはそれらの諸学を前提としたり、仮説としてさえも利用してはならないのである。』(フッサール)

#### <第2段階>

1：現象学的還元(一切の超越したものを排除する努力)を通したもののみを認識の対象としよう。

デカルトのコギタチオ(体験)すらも、もしその体験が記述される場合、既成の概念や方法、用語を用いてなされるのであれば現象学的還元が必要である。側方運動をさせて“見えるがまま”を見取ったとしよう。その時の認識は“リアルな内在”になれるか。否である。“側方運動のさせ方”“観察の仕方”に既成概念が入って

いるかも知れないからである。具体的に例題をとって考えてみよう。



私が「では右へ側方運動をさせてみてください」と言ったとしよう。この場合、右に側方運動をさせるといっても、その微妙な方向と大きさは考慮されていない。右に側方運動をさせる時に多くの患者さんも歯科医師も右下犬歯が右上犬歯を乗り越える程には側方に顎を動かさない。しかし、右下犬歯が

右上犬歯を乗り越えて、右上犬歯の表側（頬側）にまで咬耗<sup>\*1</sup>のある場合が散見される。

側方運動と一口に言っても、側方運動の大きさは実に幅が広いのである。同様に運動方向も右側方運動といっても後に引きながらなのか前に突き出しながらなのか方向にも幅があるのである。“見えるがまま”を観察するといっても“今この一瞬に見えたがまま”でしかないし、歯科医師が命じた限りの側方運動であり、しかも歯科医師の先入観の中の側方運動指令でしかないことがわかるであろう。

志向的内在は取り扱わないことを述べたが、リアルな内在を得るためには単に“見えたまま”ではいけないことに注意をしておくはならない。さらには純粹な認識（リアルな内在）がどうして私の外のものに的中するかという第2段階の問題も生じてくる。（タバコ屋のバアさんのリアルな内在としての認識はポスターだけである。しかし正面像の素顔のすました顔だけから、どうして変装した笑顔の犯人の横顔からでも“犯人”を分別して、“犯人”として認識出来るのであろうかという問題。）



いくら眼鏡をかけても、笑って  
1枚の手配写真で犯人は  
分かっているのだ。何故だ。

「1枚のポスターからでも犯人を知る事ができる。」ことは、重要なことを含んでいる。具体的に考えてみよう。10円硬貨を1つ手にとって観察してみればよい。我々は今、極めて厳密な認識について考察していることを念頭に置いてこの文を読んで欲しい。あなたの目の前の10円玉。今、手の中で表、裏を見たとする。手は動き、首も動いているから、視線と10円玉との距離も角度も刻々と変わる。同じ10円玉だが、2度と同じ10円玉をあなたは見る事が出来ない。朝日の中の10円玉と夕日の中の10円玉も違うであろう。10円玉ですらそうであるから、あなたのボーイフレンドやガールフレンドも昨日の彼、彼女と違うのはもちろん、一瞬前の彼、彼女とも違うのである。しかし、だからと言っておつりで渡された10円玉を10円玉と認知出来ないわけではない。だからと言って、自分の妻を人違いする訳でもない。長い寄り道で申し訳なかつ



たが、要は、直観したリアルな内在を数多く集積したから認識になるか、と言うとそうではないのである。10円玉を表、裏ともわずかに角度を変えて無数にその形態を直観し、頭にインプットしたから10円玉が認知できるようになったというのではない。

だから、タバコ屋のバアさんの話ではないが犯人を認知できるためには、犯人のすべての表情が必要ではないのは、1つのリアルな内在が何かのプロセスを経ることに

より、犯人という認識に到達出来るからである。これは、どの人にも言える事であるから、一応普遍的なプロセスであろう。フッサーはこれを「イデー化的抽象」という難しい語を用いているが、ここでは「理念化」と略称を用いることとしよう。

「理念化」により刻々と位置を変化する10円玉でも同じ10円玉と判り、刻々と変化するといえども、自分の妻を間違ふ事もなくなるのである。更には、馬を見た場合に眼前のその動物は初対面であるにもかかわらず、過去の別の馬を見たときの「理念化」のおかげで、その動物が「馬」であることもまた判るのである。

ここに、個人的で個々の直観（リアルな内在）を普遍化させ、客観という世界に飛び出す突破口を得ることができるのである。

### 3：リアルな内在と「理念化」

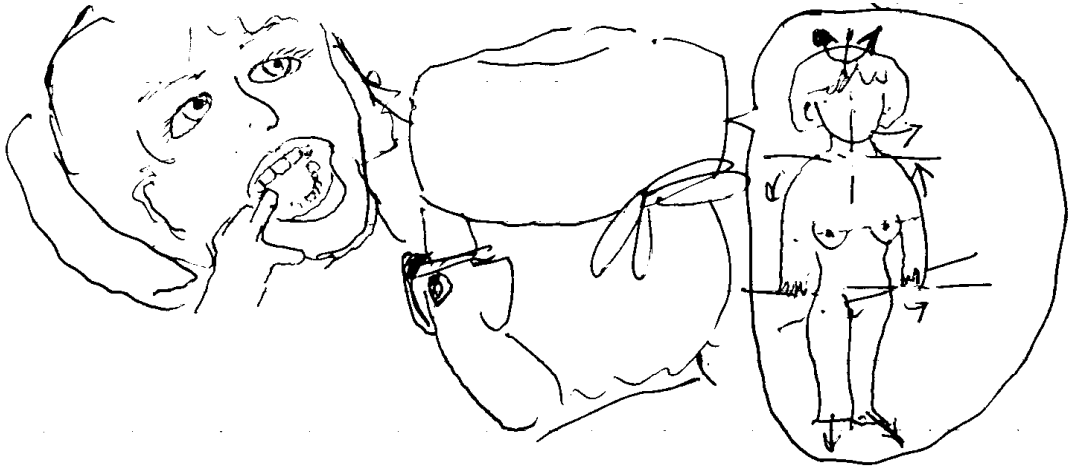
「理念化」は1枚のポスターからもできるが、多くの場合は「リアルな内在」を多く集積し、そこから「理念化」を計るのである。個々の馬から馬一般へと転換していくのである。患者さんの咬合を観察していくと、1回や2回の咬合では判らなかつた“癖”とか“傾向”とか“特徴”のようなものが見えてくる。“普遍性意識へ高めよ”（フッサー）は正にこの事を指す。

しかし、実は普遍性意識へ高めることつまり、理念化はそう単純なものではない。むしろ、1枚だけのポスターでは別人を犯人としかねないと同様、安易な「理念化」は対象を誤認してしまう。だからと言って、無限に咬合させて、無限に「リアルな内在」を集積しても、その無限回教の咬合にもかかわらず、その患者は「一番重要な咬合を歯科医の前ではしなかつた」のであれば、むしろ、膨大な資料からくる自信と裏付け故により、本質から余計に遠ざかることも考えられるのである。

「理念化」された対象は「リアルな内在」ほど確実ではない。しかし、「リアルな内在」は確実ではあるが、それは対象の気ままで気まぐれな、万に一つの事例かもしれず、普遍化できない代物で瞬時だけの確実さなのである。であるから、「リアルな内在」も「理念化」された内在も、共にまだ信頼できる認識ではない。

では、いかにして認識に到達できるのだろうか。我々の出発点はデカルトのコギタチオ（体験）しかない。つまり、最初の出発点は直観により得られる「リアルな内在」しかない。これは無数に集積すればするほどよいと言うものではない事は述べた。

漫然とコギタチオを繰り返すのではなく、「完全な直観」を意識せねばならない。何回も咬ませている間にその人の咬み癖が見えて来る話をしたが、歯科医であれば誰も見えて来る訳ではない。例えば、その時“見えているはずの咬合面の左右差”をその歯科医師が直観できているかどうか、更にはその時、その患者の咬合が左または右に偏位していることが直観できるかどうか、その時その患者の顔貌が左右に偏位していることに、また肩の高さが違うこと、足の長さが・・・等の直観ができるかどうか、まさにその歯科医の直観能力に懸かっているのである。一口に直観というが、想像以上に困難な作業である。咬合を見よ（直観せよ）という場合は、口の中を慢



然と見よと言っているのではない。その人の全身を含めて見なくてはいけない。直観は目が行った所だけを見るのではなく、全てに目を行かせなくてはならない。目を行かせたとしても、眼球の網膜には映っても、意識の中に映じていなくては何もならない。咬合を見よと言われたときに、口の中の見える範囲の咬合だけを見ると言うのでは、既に既成に捕らわれているのである。「咬合を見る」時であっても「咬合だけを見れば良い」という既成概念に捕らわれてはいけない。「一切の超越者を排除せよ」と言ったではないか。この時初めて我々は「歯科」の拘束と「歯科学」の「目かくし」から解き放たれるのである。

このように1つの診断に歯だけではなく食事の癖とか何と多くの直観：「リアルな内在」が必要とされることか。リアルな直観が、しかも完全な直観が、つまりtotalな直観が要求されるのである。totalと言ったが直観はとんでもないところまで行き届かせねばならない。例えば、誰が歯の苦痛を訴える患者の足の裏の観察を必要と思うであろうか。しかしtotalな直観からすれば必要なのである。こんな場合は私の臨床の場では雑談の形をとる。「左でばかり咬んでいると、左の腰や足が痛くなるんですよね、不思議と。」と言っていると思ひ当たるひとは反応してくる。「アレ？私、左足に魚の目ができる。左だけ。」と言う具合に。顎が左に偏位すると（特に歯科治療により急な左偏位に変化をすると）体の重心は左に偏り、左に魚の目をつくる。患者さんをtotalに直観すれば、左足の魚の目は歯科にとっては重要な診断要素である。

直観を既成概念によって成してはいけない。フッサールはその直観、完全でtotalな直観を絶対的直観と言っている。この絶対的直観から「理念化」が成されるのである。理念化された対象はコギタチオの中から得られたものであるからコギタチオ同様、疑うことのできない明断性、判明性を有している。ただ、「リアルな内在」と比べると抽象化されたものだけに「リアルな内在」を「実的内在」とでもいうのであれば、「理念化」された内在は「超越的内在」とでもいうべきものである（フッサール）。ただここでフッサールの断定に注意をしておく必要がある。確かにデカルトはコギタチ



オを原点として、自我を見出した。しかし、だからと違って全ての Cogitatio に明断性、判明性のパスポートを出した訳ではない。デカルトは慎重である。デカルトの方法序説はその慎重さを説く叙述である。デカルトは思考を次の順序で構築した。そしてこの慎重さの方法論は今日の科学成立の基礎を与えたのである。私なりにデカルトの思考段階をフッサールの段階に付き合わせてみた。

- 1 明証の法則（フッサールの「リアルな内在」）
- 2 分類（フッサールの「イデー化的抽象」）
- 3 順序と構成（フッサールの普遍性意識による構成）
- 4 点検

デカルトが今日に生きていたとすればフッサールに疑問を呈したであろう。つまり、「絶対的直観」が得られた保証はどのようにしてなされたのか？とか、「理念化」された「内在」が、どれほど「明断な内在」か、それを「超越的内在」と呼んでよいかどうか等には多分疑問を呈したであろう。この辺がフッサール現象学の弱点かもしれないが、しかしこれでフッサールの全てが否定される訳ではない。ここを注意さえすれば、フッサールのもたらすものは計りしれず大きいのである。

### <第3段階>

「春の小川」という小学唱歌がある。

「は一るのおがわはさらさらいくよ」音符でいえば「ミソラソミソドドラソミドレミ」。音楽は絵画と違って全体を提示するには時間という要素がいる。いま「は一るのおがわ」の「お」をオルガンで聞いている瞬間としよう。今聞いている「お」は（オルガンであるから「ミ」であるが）、過ぎていった「は一るの」の「ミ」、またはこれからの「さらさらいくよ」の「ミ」と同じであるが、「ミ」だけであれば訳のわからぬ単なる「ミ」である。「は一るの」の「ミ」か、「おがわ」の「ミ」か、「いくよ」の「ミ」かは、流れの中で考えなくてはいけない。

過ぎ去った音はすでに現今において聞いてないのであるから「リアル（現今の）」なものではない。「春の小川」は、「リアルな内在」の音の認識によって曲が認識されるわけではあるが、私達は「リアル」な音のみで鑑賞しているのでは決してない。「おがわ」の「ミ」は先立つ「は一るの」の「ミソラソ」と関連づけて対象としている。フッサールは1つ1つの直観を「ド」「レ」「ミ」のようなものとして考えた。直観は直観として疑い得ない明断性を有しているが、それは「春の小川」の「ド」「レ」「ミ」のようなものであり、私達が認識としているものは「ド」や「レ」や「ミ」ではなく、「春の小川」という曲であるというのである。咬合を観察し、その「立ち現れ」1つ1つを直観したとき、1つ1つの直観は単に「ド」「レ」「ミ」でしかなく、それらが統合されたとき、「春の小川」という曲に相当する）はじめて咬合という全体が現れて来るというのである。保護色で隠れたチョウや擬態で隠れた昆虫は、それらが動かなければ、いくら直観しても見えない場合がある。彼、彼女の「おしりのなでまわし」も

そうである。1つ1つの直観では意味をなさないが、直観を連続させることにより、または集積させることにより、直観だけ（確実な内在）では表し得ぬものが現れて来る場合もある。つまり、直観した「リアルな内在」を連結したり、集積したりする意識の作用で、その「連鎖体」や「構成物」が私の内部に形成される。これを認識客観と呼ぶことにしよう。（認識客観というレベルにまでくると、もはや直観は構成要素ですらなくなる。例えば「春の小川」は「ミ」を除外しても「春の小川」と判る。）

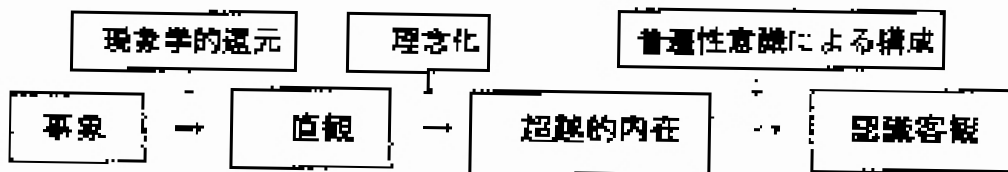
このようにして、私の外部の「事象」は、私の内部に取り込まれるのである。（直観と現象学的環元を経ないで取り込まれる事象は、単なる超越物でしかない。）

このように「取り込まれた内在」と一口に言っても「リアルな内在」、「超越的内在」更には構成されて、すでに直観とはかけはなれてしまったとも思える位に変容した「認識客観」等と分化していくのが理解されるであろう。

### おわりに

「現象学」をすすめていくにつれ、我々は単に直観さえすればよいといった平凡なものではないことを悟るのである。私の外にあった事象がどのようにして直観からもはなれて認識客観に構成されるのであろうか。

一応図示しておいたが、これは単なる連携でもなければ、順序でもない。独得な



仕方で統合され、いわば相互に補完しあう統一である。（「部分を考えることは全体を考えることである」がここでもまた現れた。）これこそが認識作用であって、現象学の課題はこれらの性質と関係の仕方の解明的分析を行うことである、とフッサールは言うのである。すべての学問（の方法論）はこの現象学の方法によらねばならないともいうのである。

もし私達の学習や研究が現象学をすることにより真の理解、真の認識を得るのであれば、これほどうれしいことはない。しかし、多くの人にあっては反省が「反省すべき従来通りのやり方による反省」でもって反省されるのである。科学の危機を科学でもって対応するが如くに「反省すればする程傷口は大きくなっていく」場合が少なくない。

学問のための学問であってはいけない。昨今は学問の現実的な有効性が問われだした。哲学においてもそうである。このような学問状況の中、「現象学」は「不毛」だという声すら聞こえる今日において、改めて現象学の有意義性を齒科の立場から強調したいのである。「現象学」のみかけの順序をふむのではなく「直観」と「理念化」の誤用があなたの内部の起こっているのではないかというフッサールの叫びに

耳を傾けて欲しいというのが私の願いである。これは必ずや、患者さんの治療法に還元されるであろう。

最後に、16世紀のイタリアの解剖学者ヴェサリウスの言葉を紹介したい。

「テキストに頼らないで、あなた自身がよく見て、よく触れてみなさい。

そしてあなた自身の眼と手を信じなさい。」

ヴェサリウス (1543) \*<sup>1</sup>

#### 参考文献

E. フッサール：立松弘孝訳；現象学の理念、みすず書房、東京  
立松弘孝；現象学とは何か、「現象学」所収、状況出版、1977、東京.